

学校で学べないことが学べた

～平成十三年年度建設産業人材確保・育成推進
キャンペーン中国ブロック会議～

平成十三年十月二十三日、ばるるプラザ山口で、建設業の次代を担う優秀な人材を確保・育成するための中国ブロック会議が開かれまし
た。会議のなか
で、建設業協会の協
力で七年前からイン
ターシップ制を導
入している山口県立
山口農業高校の人材
育成への取り組みが
紹介されました。



「学校で学べないことが学べた、最先端の技術や機械を知った、社会人と一緒に仕事
ができた、教師と違う指導、
人生観に触れることができた」
実際に将来を考えて入学
してくる生徒はほとんどいな
い現状のなかで、生徒が初め
て自分の適性や将来について
考えるきっかけになっている
ようですと話す中村先生。三
年生の面接で聞くと、三年間
の思い出として修学旅行とイ
ンターシップ制を挙げる生
徒がほとんどです。学校と違



中村 雅彦
山口県立山口農業高等学校
環境土木科長

山口農業高校の取り組みを
報告したのは、中村雅彦教諭
（今年から県立田布施農業高
校環境土木科長）と山口農業
高校環境科学系二年の沖元翼
君、受け入れ企業の立場から
シマダ株式会社建設事業部部
長の三浦政則氏の三名です。

う体験をしたということが子ども達
にどんな大切かを実感します。
「この道路はぼくが作った」と
誇らしげに言うんですね（笑）。
ほんとはほんの少し手伝わせて
もらっただけなのに。
また、「挨拶をしない、元気が
ない、何を勉強しているかわから
ない」など、受け入れていただ
いた企業さんからの叱りもありま
す。学校で何をやってるのか生徒
に聞いてもわからないから授業計
画を持たせてもらえないかといわ
れたこともあり。受け入れ企
業の皆さんにはご迷惑をおかけし
ますが、進路指導や生徒指導の面
からも地域企業の教育力は大きい
のです。インターシップ制を導
入する学校がこれからも増えてい
くと思われませんが、こうしたブラ
スマイナスだけでなく、生徒が確
実に変わるということですね。
それから最後になりましたが、

生徒を送り出す学校としても生徒
も一番不安なのはケガです。今ま
で七年間一度も事故や小さなケガ
すらなく、安全管理のもとに研修
させてもらっていることにお礼を
申し上げます。
続いて今年
の八月六日
から四日間、
現場実習に
出た同校二
年の沖元君が
報告しました。
学校では習得できない実践的な
実習体験、自己の進路意識を高め



沖元 翼
山口県立山口農業高等学校二年

「通年ですと一人一人違うん
ですが、今回は三人とも同じ現場で
実習してもらいました。今年の夏
は特に暑くて大変でしたが三人と
も頑張っていました。
最初の三日間は、現場の概要の
説明と安全の決まりを知ってもら
い、測量のやり方、写真撮影の補
助をってもらいました。四日目は
パソコンでCADの研修と生コ
ンの現場を見学してもらいまし
た。実習生の心構えは年によつて
も違うのですが、今年の三名は建
設関連で働きたいと言っておりま
した。
今は大学生もインターシップ
で来ていますが、自分の進路を考
えるいい機会だと思えますね。
ものを作るには苦しさ、辛さがあ
ります。でも、どんなに小さな仕事
でも一つのことを成し遂げたやりが
い、自分が得た達成感は何物にもか
えがたいものがあります。
こうした気持ちで次の世代に伝
えていきたいと考えています。」

最後に受け入れ企業の立場か
ら、八月六日からの四日間、三名
の生徒を受け入れたシマダ株式会
社の三浦政則氏が報告しました。
「四日目は実際に現場で丁張りの
設置（杭打ち）。丁張りが終わっ
たときは達成感がありました。午
後には最初にやった測量の縦断面
と横断面を製図用紙にプリントア
ウトしました。
この四日間は、私にとって土木
の魅力を知ることができた有意義
な時間でした。この時の担当者の
言葉が私の目標となりました。
それは「作った人にしかわから
ない達成感」を感じたいというこ
とです。クラスのみんなにもそれ
ぞれ実習の感想を聞いてみまし
た。『今まで何気なく見ていた道
路工事への見方が変わった』『実
習はつらかったが楽しかった』『
自分の勉強不足を感じた』『授
業をまじめに受けねば』『プロの
仕事を見ることができてよかつ
た』など、それぞれ何かを得たよ
うです。終わりに、お忙しいなか
をご迷惑おかけしました。有意義
な実習をさせていただいてありが
とうございました。」



三浦 政則
シマダ株式会社
建設事業部

それぞれの場所に合わせた工事方法を

～急傾斜地の崩壊防止工事と沖合人工島造成～



説明を受ける宇部西高生

平成十三年八月、山口県立宇部
西高校環境緑化系列の生徒三十七
名が、下関市での現場見学会に参
加。猛暑のなか幡生町の急傾斜地
崩壊対策事業の現場と垢田の沖合
人工島の見学を行いました。
「土木の子はもちろん造園を勉
強する子にとっても、緑化などの
現場を知るいい機会なんです。学
校では学べないことを実地で見て
知ってほしいですね」と引率の山
崎盛敏先生。

下関市幡生町の一帯は崩壊危険
区域に指定されており、梅雨や台
風のたびにがけ崩れなどの被害が
出ています。ここでは、従来のよ
うなコンクリート建造物をできる
だけ使用せずに斜面を緑化してい
く環境共生型の対策工事が行われ
ていました。
住宅がすぐ下にある急傾斜地の
ため現場は狭く、ほとんど人力で
作業が進められ、レンジャー部隊
が使うロープのようなものが斜面
に沿って何本もぶら下が
っていて、一人一人がそ
の綱を腰に留めて昇降し
ながら作業を行うのだそ
うです。「こういう狭い
急傾斜地では、機械施行
は将来的にも難しい。人
力でこれからもやってい
くことになると思いま
す」と施工者の日特建設
さんが説明します。
「あのロープで実際に



急傾斜地の現場



沖合人工島の橋梁群

けんせつ
WOMAN

大きな機械を動かすのが大好き！

西川 敬子さん

KEIKO NISHIKAWA ●勝井建設株式会社（岩国市）
●昭和54年生、山口県岩国市出身、県立岩陽高等学校普通科卒業●O型、魚座

勝井建設株の資材センターでは、資材の移動にクレーンが動いていました。運転していたのは西川敬子さん、22歳。重機運転が大好きな、元気いっぱいのヤンママです。

とにかく大きな機械が大好きで、トラックやクレーンを動かしていると楽しくて。高校は普通校だったんですが、学校に来ていた求人重機のオペレーターの職種があって、建設だけど女子でもよかったんです。それで決心して入れてもらいました。

入社して1～2年の間に玉掛技能講習、移動式クレーン運転免許、大型特殊免許、車両系建設機械の資格を取りました。会社から講習とかに行かせてもらえるのでありがたかったです。運転手としてどうしても必要な資格だから、私もできるだけ早く取りたくて。今ですか？今ねらってるのは大型トラックの免許なんです。前に取りそこねちゃって。普通のトラックなら運転できるんで、それで資材を運ぶ仕事があるとうれしい（笑）。

山道とかをどんどん行きます。クレーンも大きい方が好きだな。あ、道路工事で道をならして行ったり来たりするローラーも動かしたりしますよ。20歳で結婚したんで、女の子がいるんです。仕事と家庭の両立は大変だけど、もともと体を動かすのが好きだからあんまり気にならない。独身時代は親がやってくれたのでぼーっとしてた時間を、家事にあてればいいわけだから。家事よりも仕事の方が好きですけどね（笑）。

現場では、女だからというので可愛がってもらえて得してるかな。将来はもっと大きな機械を動かせるようになりたいし、仕事はずっと続けたいと思います。

教育現場訪問 ② 山口県立宇部西高等学校 / 土木科・造園科